

◇拠点形成概要

機 関 名	東京大学		
拠点のプログラム名称	死生学の展開と組織化		
中核となる専攻等名	人文社会系研究科基礎文化研究専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 島 蘭 進 教授	外 14 名	
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本研究拠点は、古今東西の死生観の比較研究や死生の価値についての理論的研究を踏まえつつ、現代社会の死生の現場、ケアや臨床の現場に生起する諸問題に応答することを通して、他に類例を見ない死生の学知に関する世界最高水準の研究教育拠点の形成を目指す。まず、世界の諸文明において、死生の知や実践がどのような形をとっていたかについて、人文学の伝統を踏まえた考察を進める。また、応用倫理、とりわけ生命倫理の諸問題は死生学と深く関わり合う。人間の尊厳、いのちの尊さ、死とは何か、死生に関わる問題についていかに意志決定をすべきかなどの諸問題に理論的考察を加え、生命倫理をはじめとする応用倫理・道徳哲学が直面する諸問題に死生学の立場から寄与することを目指す。そして「死にゆく人びとに対するケアのあり方」をはじめとし、医療現場でのケアの実践や臨床的な知の諸問題に答えていく。さらに、死と生とは不可分のものであるとの基本的認識に基づき、ケアや養育の現場で求められる知の学問的基礎づけを行う。このように広く死生をめぐる諸問題に応じようとする学は、死にゆく人びとの周辺の課題のみを取り上げてきた従来の死生学 (Death Studies) の限界を超え、死生の現場・いのちの危機の現場を広く取り巻く問題状況全体を見渡しつつ、人文社会系の諸学の成果を総合した、学際的な知を展開・組織化していくことを可能にする。</p> <p>〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕</p> <p>21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」(略称「死生学の構築」)によってなされた死生学の基礎構築を踏まえ、死生学研究の展開を進めるとともに、自立した学として、また人材育成システムとしての組織化を推進する。以下の3つの分野において、死生学の展開を推し進め、世界的な水準の研究拠点としての内実を整える。</p> <p><b>(1) 死生の文化の比較研究</b>——世界の諸地域の古今の死生観を表す思想・文芸、形象文化等の研究、死や生殖・誕生、死生の循環をめぐる儀礼や習俗等の研究、死者の記憶や追悼に関する研究を進める。<b>(2) 死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察</b>——現在の欧米の死生学や生命倫理学をはじめとする実践哲学の達成を踏まえ、日本の状況を踏まえた独自の考察や伝統に立脚したケア実践や倫理の理論を構築する。<b>(3) 人文学の現代的実践現場への関与</b>——人文学の伝統を踏まえつつ、現代的な実践現場に関与していく臨床的な知の形成のための方法論的省察を深め、それを実践に展開していく。以上のような学問的内実を達成しつつ、あらたに日本から発信する死生学として、独自の貢献を明確にしていく。また、①大学院やPDの段階での死生学教育を強化し、関連諸分野の若手研究者が死生学の分野で十分な実力を発揮する体制を築くとともに、②医療やケアの現場で実践にたずさわる人々が、死生学の専門的知識を身につける体制の組織化を進める。</p> <p>こうした展望の下に以下の諸課題を追求し、具体的成果を上げている。</p> <p><b>(i) 死生学の諸領域における知の組織化</b>——21世紀COEにおいて構築した死生学の基礎を踏まえ、死生学の学的体系化・組織化を推し進めている。内外の最先端の研究者を招聘して死生学の理論的深化を進め、その成果の刊行を行っている。生命倫理等、応用倫理の諸問題を、人類史を見渡した広大な知的視野のもとに捉え直していく学として本拠点の死生学は構想されている。古今東西の死生の文化についての研究の分厚い蓄積を土台として、欧米やアジア、とりわけ中国や韓国、さらにイスラーム圏を含めアジア諸国の研究者との交流を通じて多面的な比較研究を行い、世界最高水準の死生学の組織化を進めている。</p> <p><b>(ii) 多分野の研究者やケアの現場に関わる人々との知的交流</b>——人文社会系の諸学のみならず、医学、教育、法学等、死生の知に関わる多様な分野の研究者との知的交流を進めている。とりわけ医療やケアの現場との連携を深めることによって、人文学を基礎としつつも生活の現場に近い学知としての死生学の組織化を進めている。そのために、ケアの現場や死生に関わる意思決定の現場で実践的な問題に取り組む専門家へのリカレント教育や市民との知的交流を進めている。</p> <p><b>(iii) 大学院生や若手研究者による次世代の死生学の基盤形成</b>——大学院生やPDレベルの若手研究者による研究活動を推し進め、伝統的な死生の知がますます機能を失うであろう未来と、高齢化社会の到来による死生観の変動のかなたを見すえた新たな死生学の基盤の形成に努めている。多様な分野の若手研究者が恒常的に刺激しあうような研究教育環境を作り出すとともに、彼らが国際的な研究交流に頻繁に参加できる研究環境を構築する。英語による発信力を養成するとともに、他の諸外国語に通じた死生学の研究者が輩出すべき人材養成を進めている。</p>			

#### ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

##### (総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

##### (コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、本グローバルCOEプログラムを大学の将来構想の実現を目指す東京大学アクションプラン推進の中核と位置付け、事業の推進と活性化のため、総長のリーダーシップの下で組織的なバックアップ体制を整え、研究の推進、若手研究者の育成、国際的交流を支援する取組みがなされており、評価できる。しかしながら、人文科学分野にグローバルCOEプログラムの採択が2拠点あることなどを考慮し、全体のバランス、また、今後の拠点形成に対する大学としての積極的な関与を明確にする必要がある。

人材育成面については、若手研究者に国際的な研究会議・ワークショップの計画・運営、研究報告への参加を促すよう配慮されており、国際性豊かな若手研究者が育成されていると評価できる。

研究活動面については、欧米の死生学を考慮し、日本・アジアの伝統を踏まえた独自の国際的に卓越した死生学の研究拠点形成に向けて着実に成果を積み重ね、**Death Studies**を包含するような**Death and Life Studies**へという目論見は成功しており、活動は問題の深さと包括性を持ったものとなったと評価できる。医療とケアの関係者だけでなく、一般市民に開かれた姿勢、また、国内的・国際的な目配りとネットワーク作りの卓越性も高く評価できる。

補助金の適切かつ効果的使用については、国際性に富む若手研究者の育成、独創性のある死生学の形成計画に見合った妥当なものであると評価できる。

留意事項への対応については、欧米のみならず、アジア諸国との研究交流も積極的に行っており、また、リカレント教育の仕組みも具体的であり、留意事項に適切に対応していると評価できる。

今後の展望については、本事業終了後の死生学センター（仮称）の構想も具体的になりつつあると評価できる。